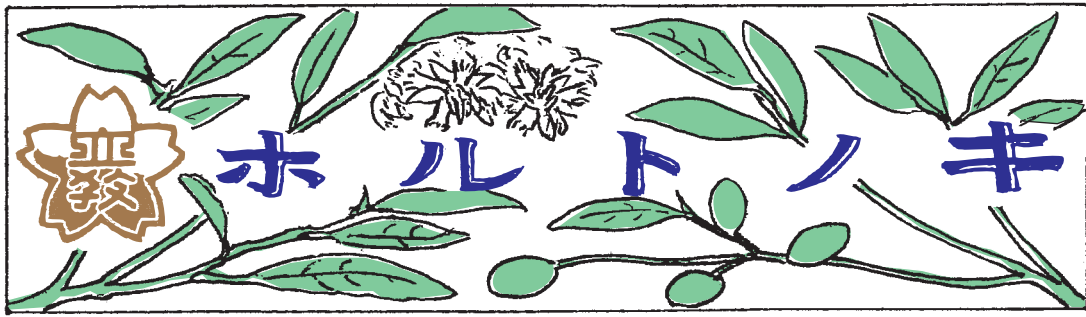




秋色に染まるチャペルのツタ

英国語学研修 (ハロウ・サマースクール)

How awesome were those two weeks?! 最高に充実した二週間であった。

私たちの滞在先は Harrow school という英国屈指の長い歴史と伝統のある全寮制パブリックスクールである。ゴルフ場や公園を有するその壮大な敷地と赤レンガ造りの美しい校舎や寮に私は圧倒され、その場所ですべてのことに胸が高鳴った。

授業は英国式の生徒参加型であり、Harrow の先生と我々生徒たちがテーブルを囲んでグループワークを基準にそれぞれの考えを共有し、場合によってはディスカッションをする形で進んでいく。また、授業の一



環としてショッピングモールで現地の方々への突撃インタビューを行ったり、七人一組のチームになってプレゼンが課されたりと魅力的なプログラムが組まれていた。



モールでのインタビューでは買い物中の方々が気さくに答えてくれたことが印象的であった。欧州の強い個人主義のイメージから、見知らぬ人に声をかけても冷たくされるのではという先入観を持っていたが、実際には真逆でユーモアがあり親切な人が多くいた。プレゼンはテーマも発表方法も含めて全て自由。好きな



ようにやってみて。といった具合で、私たちはこの自由さに頭を抱えたが、これは個人の自己表現や主張と重視する英国教育の文化を肌で感じた瞬間でもあった。悩んだ挙句、私たちは「日本一周すごろく」を作り、敢えて通常の資料を基に発表するというプレゼン方法を取らずに、スタッフや先生方を巻き込んで都道府県別の伝統や文化を書いたすごろくゲームを行うことで日本を表現する方法を取った。これが意外と盛り上がり、excellent project 賞をいただいた。限られた時間の中でアイデアを出し合い、プレゼンの概念に囚われず思い切った手法を取ったこの経験は私の中で大きな財産となった。

また、オックスフォード大学や自然史博物館、ウィンザー城やバッキンガム宮



殿、ブレナム宮殿など多くの観光地を訪れ、夜のアルバートホールでの音楽鑑賞なども経験したが、Harrow の授業では行く先の情報や歴史についてイギリス英語での表現を交えた形で詳しく学ぶこともでき、現地での見学をより豊かなものにしてくれた。今回の英国研修を通して、バイアスをかけずに人と接することの大切さや真に主体性を持って学ぶというなど、楽しさ以上に得るものが多くあった。加えて、コミュニケーションツールとして英語の重要性を再認識した。人が直接発する言葉はどんな優れた機械を使って翻訳した言語よりも人の心に響き、刺さる。そう感じることでできたこの二週間の貴重な経験を活かし、今後も自分の夢に向かってより一層精進したいと思う。

(高二 西本大晟)

キャンプステイブンスに参加して

今年の夏休み、私は七月二十五日から十二日間にわたり、アメリカのサンフランシスコとサンディエゴ付近で開催されたキャンプ・ステイブンスに参加しました。このキャンプでは、現地の同世代のキャンパーたちと寝食を共にし、異文化交流を深める貴重な体験ができ、アメリカに対するイメージが、実際にどのようなものかを確認する良い機会となりました。

まず、サンフランシスコに対して、治安が良くないという印象を持っていたが、実際には訪れてみると、街並みは西池袋とそれほど違いはないと感じました。ただし、ホームレスの方々や街の風景の一部となっていることにショックを受けました。後から聞いた話では、コロナ禍で仕事を失った人々が急増したとのことでした。アメリカに根付く格差の大きさを目の当たりにしました。



経験を通じて、日本の夏がいか湿度が高く、暑いかを改めて実感しました。土地の広さと気候の変動を実感し、自然環境に対する新たな理解を得ました。キャンプ・ステイブンスでは、十七人のチームに分かれて活動を行いました。アメリカ人のキャンパーたちも様々な人種があり、一緒に過ごす中で彼らの多様性に触れることができました。キャンプ場では屋根はあるものの、壁や机がないオープンなスペースで寝泊まりしました。最初は戸惑いましたが、夜になると見上げる空には満天の星が広がり、まるでプラネタリウムのように流れて星を見ることができ、感動を味わいました。日中は「アドベンチャー

タイム」と呼ばれる時間があり、アスレチックやチーム対抗の旗取りゲームなど、さまざまな活動を楽しみました。最初は緊張しましたが、日が経つにつれてチーム内で会話が生まれ、トランプをするなどの楽しい時間を過ごしました。驚いたことに、名前は違っても日本のルールと同じゲームがあり、異文化でありながらも共通点を見つけたのは嬉しい発見でした。

ごま、現代のバイブレードを持って行ったところ、現地の子どもたちだけでなく、大人たちも興味津々で楽しんでくれました。特に印象的なのは、ある子供連れの女性が初めて独楽を回すことができた瞬間でした。彼女がとても喜んでいたので、ペーゴマをプレゼントしたところ、非常に感謝されました。現地の人々が日本の文化を楽しむ姿を見ることができ、とても嬉しかったです。

今回のキャンプを通じて、実際に自分の目で見て触れることができた。キャンプの前後にはシアトルの市内観光がある。(僕のアメリカン参加の志望動機はこの市内観光であつたといつても過言ではない)まずそこで日本語が本当に使えないということに体から覚える。そして迎えるアメリカン本番だが、こちらはさらに会話に困る。数人のグループで毎日アクティビティやキャンプファイヤー、コンプリなどをこなしていくわけだが、アメリカの人はとても明るいので、想像以上に話しかけてくる。(テキストにイエスばかり言っているとは大変な目にあうことも)先ほど大変だという話ばかりしていたが当然魅力も盛りだくさんだ。その中でも特に印象深いのは、食事



コミュニケーションの本質
— キャンプ・ヒューストン —
アメリカンキャンプ(以後アメキャン)とは、本当の意味でコミュニケーションとは何なのかを学べる場所だと考えている。それは、日本での常識が通用しない異国の地であつたからこそ学べたことであると思う。

キャンプの前後にはシアトルの市内観光がある。(僕のアメリカン参加の志望動機はこの市内観光であつたといつても過言ではない)まずそこで日本語が本当に使えないということに体から覚える。そして迎えるアメリカン本番だが、こちらはさらに会話に困る。数人のグループで毎日アクティビティやキャンプファイヤー、コンプリなどをこなしていくわけだが、アメリカの人はとても明るいので、想像以上に話しかけてくる。(テキストにイエスばかり言っているとは大変な目にあうことも)先ほど大変だという話ばかりしていたが当然魅力も盛りだくさんだ。その中でも特に印象深いのは、食事

ある。そんな「Japan Day」だから、アメリカの人との絆を高められる一番のチャンスである。僕もこの日を境に話しかけられるのが嫌だという気持ちにならずに、自分から話しかけに行くようになった。

私はこのアメキャンで「コミュニケーション」とは何なのかというのを今までとは全く違う視点から学べたと思う。今我々は、将来のためにと英語を学んでいるものの、授業や教科書で扱うような英文はどこでも使う場面はなく、文法に関する知識は授業で先生から英語とまた違うし、第一早くて聞き取れないのでそれ以前の問題だ。私は個人的に英語が得意だと思っていたので、レベルの違いに衝撃を受けた。しかし、そんな堅苦しいことより大事なことはジェスチャーや、明るく接すること、つまりどれだけ相手に伝えようとしているかが重要であることだ。確かに彼らの言っていることの99%は理解できなかった。でも、彼らは一生懸命言っていることを理解させて

ようとし、私たちの言っていることも理解しようとしてくれた。だからその時々で、楽しい、悲しい、うれしいなどの感情をシェアすることができた。だから僕は伝える努力、理解しようとする努力で言葉の壁をいくらかでも低くすることができると思う。

「主催者」となる必要があり、アメリカの人の質問に答える必要も

「主権者」となる必要があり、アメリカの人の質問に答える必要も



う科学者に関する収蔵品があり、王立協会ではマイケル・フアラデーやJ.J.トムソンなどの偉大な科学者たちの実験器具が展示され、リンネ学会にはダーウィンの昆虫のコレクションや『種の起源』の初版本など貴重な資料を見ることができ、科学が好きな僕には素晴らしい経験となりました。

に思ったことは積極的に英語で質問する、わかなければ素直に言うなどの環境が整っていたため、失敗を恐れずに会話をすることができ、プロジェクトの終盤では滑らかにイギリス人と会話ができるようになり自分の英語力にも自信を持てました。また、ケンブリッジ大学の研究室や講義の一部を受けることができたことで、海外の大学や大学院で学ぶことや海外で働く選択肢があり得ない選択肢でないことに気づくことができました、そうした自身の将来を決めるようなことにも、私が学んだような不安を覚えてあれこれ考える前に、飛び込む勇気が必要な力なのだとなりました。

このプロジェクトはそういった意味でこの学校にいる我々に平等に与えられた素晴らしいチャンスです。成長の機会が欲しい人や英語力や科学の知識のレベルを知りたい人などの向上心がある人にとって素晴らしいチャンスであることはもちろんですが、海外に行ってみたくてかケンブリッジ大学に行ってみたくてという理由だったとしても色々なことを得ることができま

す。それに加え、選んだサブジェクトによって異なりますが、ケンブリッジ大学で教鞭をとる教授たちの研究室に入り、実験を行ったり講義を受けることは滅多にない貴重な経験です。理由はどうかあれ、少しでも興味があるならば海外ということをおそれずに得られるものはきっとたくさんあるからです。こうした機会に恵まれた我々立教池袋の高校生の中に、少しでも興味がある人がいるならばぜひ挑戦してみてください。

(高三 生井陽行)

保育園ボランティア

二〇〇七年度から始まった保育園ボランティアは、コロナ禍でいったんお休みしましたが、昨年度から再開しました。今年度は十八名の参加希望がありました。が、コロナや手足口病の流行により、参加できたのは十三名でした。

担当教職員が、保育園に活動の様子を見に行くと、暑い中、笑顔で熱心に活動している生徒の皆さんの姿がありました。最終日は学校に戻って体験をシェアしあい、ボランティアでの学びを深めました。会の最後に、「ボランティア活動に参加した今の気持ちは（青のカード）？その気持ちはどんな願いが満たされたから、わいてきたんだらう（黄色のカード）？」を、一人一人考えて発表しあいました。保育園ボランティアが、それぞれの願いが満たされた、有意義な活動であ



保育園ボランティアシェアリングの会
2024.7.31

ったことを共に喜びあいました。生徒の感想です。「今回の夏休みまでは七月末の間に私は池袋第二保育園に行き三日間の保育園ボランティアを行った。私が今回の保育園ボランティアに参加した動機として、私



家庭科で高校2年生が作ったクッションを園にプレゼントし、園児の皆さんに喜んでもらっています

には従妹が七人おり一番が年上かつ小学校五年生から一番小さいのはまだ一歳であり、親戚間で集まる時にはほとんど保育園と同じような環境に置かれることが多い。そのような環境の中で私は年齢の離れる子供とのコミュニケーション能力に欠けていて、今回保育園ボランティアで学



び、私含め園児たちも楽しめたのではないかと保育園ボランティアが終わった今では保育園に通っており今の保育園と私がつながっている時の保育園ではいろいろな異なる点を確認することができた。現代の子供たちの優遇された環境に対して少しうらやましく思うところもあった。今回の保育園ボランティアで様々な園児と触れ合う

ことができボランティアを始める前と後では私の中でのコミュニケーション能力に大きな影響をもたらしてくれたよい経験であった。次来年もぜひ機会があったら参加してみたいと考えた。」

(高二 西田蒼空)

四度目のボラキャンに参加して ―清里環境ボランティアキャンプ

私はこの夏、七回目の清里を訪れた。清里は私にとって、もう無くてはならない夏の避暑地になっている。私が今回参加した清里環境ボランティアキャンプは、立教小中学生から大学生が二泊三日、山梨県の清里清泉寮で寝食を共にして、環境保全ボランティアなどをするものである。このプログラムに参加するのは実に今年で四回目のことだ。今回のキャンプで印象に残っている事はあるが、その中でも特に記憶に残っていることを、簡潔に三つ話したいと思う。まず一つ目は、このキャンプのメインであるボランティア活動だ。年齢の幅が広い中で協働をするというのは、苦労を感じることも多かったが、それよりも一緒に活動している楽しさが勝ち、あの達成感の中味わえないと毎回の事ながら思わせた。

二つ目は、立教学院百五十周年を記念したキャンプファイヤーだ。清里の自然を存分に感じることでできる真つ暗な夜の下で、みんなが火を囲みながらチーム対抗のゲームをしたのは、立教小学校の時に軽井沢のみず山荘でした時に来だったので、その頃の色々な記憶が湧き出てきた。三つ目は、二日目の夜に行われた高校生と大学生の交流会だ。そこでは、大学の話など普段は中々機会が無く聞けないような実体験をはじめとし、日常や趣味の話など、とてもたくさん話をするのができ、今年で高校生になった私にとって、とても刺激の良い交流の場となった。この三つ以外にも、部屋で小学生と遊んだり、中学生の新たな友達ができたりと、たくさんの夏の思い出をこのキャンプで作ることができたと思う。

このようなことから私を感じる、このキャンプの良いところは、年齢や学校を超えた交流にあると考えている。私がこのキャンプに初めて参加したのは小学四年生の時なのだが、優しい中高生や大学生と一緒にボランティア活動をしたり、日記を書かされたり……したことは今でも鮮明に覚えているため、最近の記憶のようにも思えてくるのだ。が、今思い返すともう六年も前のことで、自分の成長をこのキャンプを通してひしひしと感じさせられ、その成長ぶりに自分でも今驚かされている。このキャンプはそんな感情を様々な場面で感じる事ができ、立教の一環連携教育の良さはここにあるのではないかな

と思わせてくれるようなものだ。もし立教にずっといなかったとしても、この年齢の壁を超えた体験ができるこのプログラムは、とても大きな価値があり、貴重なものだと感じている。大学生になっても一度参加する機会に恵まれれば、是非また参加したいと考えている。

(高一 的野悠大)

第五回 ワークキャンプ

毎年群馬県の高齢者施設にてボランティアキャンプを実施していたワークキャンプですが、二〇一九年度の第五十回を最後に新型コロナウイルス感染症の流行により、二〇二〇年度から二〇二三年度まで実施できま

せませんでした。今年度は施設での外来者の受け入れが可能となり、群馬県利根郡川場村の介護付き有料老人ホーム「ヴィライージュ尾瀬」で八月二十四日（土）から二十六日（月）の二泊三日で、五年ぶりの実施に向けて準備を進めました。高校生一名、大学生三名、社会人四名の計八名の参加者が集まりました。現地では、施設内の掃除や入居者の方々の食事の配膳等のお手伝いを始め、入居者の方々の夏祭りも企画されており、高校生や大学生はその出し物の準備に励んでいました。ところが実施直前に、施設内で入居者と職員の方複数名が新型コロナウイルス感染症を発症され、急遽中止となりました。残念なことではありましたが、施設の方からはまた来年お待ちしていますとのメッセージをいただきました。

(引率 原 真也)



月号（日本将棋連盟発行）に掲載されています。小学一年生の時から将棋を始めて約十年、長い間ずっと夢見てきた全国優勝という目標を達成できうれしいです。これからも将棋を楽しみながら頑張っていきたいと思っています。
（高二）重田和樹

重田和樹君（高二） 第二十回高校生王将戦で優勝

私は今年八月、日本将棋連盟、スポーツニッポン新聞社主催の第二十回高校生王将戦に出場し優勝することが出来ました。

高校性王将戦は、全国高等学校将棋選手権戦、全国高等学校将棋竜王戦と並ぶ全国大会の一つです。高校生活も折り返し、私はそろそろ目に見えた結果が欲しいと強い気持ちをもってこの大会に臨みました。

この大会で一番印象に残っているのはやはり決勝戦です。この対局では、わずかに九手目に仕掛けてくるという相手の急襲を受けて形勢を損ねてしまします。ここで私は徹底して自陣を守るという作戦に出しました。特に本来攻めの駒である飛車を守りに使ったことが相手の意表を突くことが出来たようです。不利だった形勢はいつの間にか難解になり、最後は一枚も駒を余すことなく、ギリギリの勝負を制することが出来ました。この将棋の棋譜は「将棋世界」二〇二四年一〇

中学バスケットボール部 東京私立中学校バスケットボール大会 第三位

本大会は今年で四十回目

を迎える伝統ある大会であり、今年度は八月二二日（木）～二六日（月）にかけて行われました。八グループにわかれてリーグ戦が行われ、各グループ上位二校が決勝トーナメントに進出します。近年は、公立校も参加する中体連の大会でも私立校が軒並み上位進出することが多く、本大会も年々レベル



ルが高くなってきています。

本校はリーグで二位となり、決勝トーナメントに進出しました。一日二試合を五日間行い、ほとんどの試合が接戦となりましたが、日に日にチームとしての成長を遂げ、ベスト4に進出しました。最終日の準決勝は、バスケットボールの聖地・代々木第二体育館という素晴らしい環境の中、惜しくも八雲学園に敗れてしまいました。約二五年ぶりの第三位という成果を収めることができました。

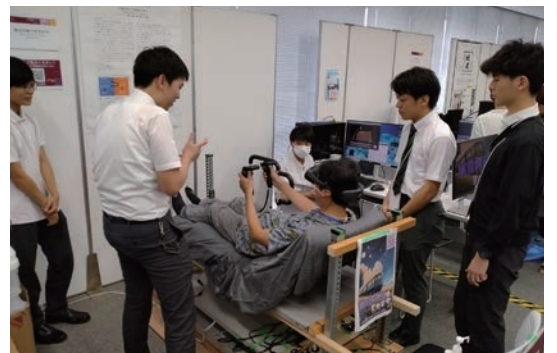
この結果を大切にしつつも、謙虚な姿勢と挑戦する心をいつも持ち、今後の活動につなげたいと思います。保護者の方々、中学三年生の先輩諸君、先生方など多くの応援をいただいたことも、この結果につながりました。

高校数理研究部

今年度のI V R C (Intervase VR challenge)

に数理研究部高校二年生を中心とするチームが採択された。今年で十一年連続である。コンテンツ名は「寝台列車ですやすや」。列車の振動が睡眠に効果があるというこで、VR内で振動と映像・音声を組み合わせたコンテンツである。九月十一日に予選会が行われ、他がすべて大学生や大学院生のチームの中、見事決勝大会進出を決めた。二〇一九年以来五年ぶりのことである。サイエンスアゴラという科学イベントにて

行われました。応援ありがとうございました。最終審査が行われるので、ぜひこの緩いVRを体験してほしい。
（顧問 内田芳宏）



審査員の方から振動や設計について好評をいただいた一方で、車窓の景色についての指摘を何度か受けた。リアル感とエンタメ性を含めた「Intervase」を通して本作品を完成させるには、十月末の決勝大会までに大幅なCGの修正が必要であると感じた。これからの一ヶ月で、この最高の作品を最々高な作品にしていきたい。

（高二）久保壮太郎

吹奏楽部 コンクールの結果

私達吹奏楽部は毎年八月に、東京吹奏楽コンクールに向けて四月から練習を行ってきた。昨年の本誌でも触れられていることではあるが、史上初となる高校の金賞かつ代表選考会三年連続進出や、中学二年連続金賞、吹奏楽部創設三十年来の中で二度目の中高同時金賞受賞等々、素晴らしい結果を残し続けている。そのような実績を背負った本年度のコンクールは非常に大きな期待と重圧を感じたものであった。

（高二）中村太凱



先に本番を迎えたのは中学コンクールである。複雑な連符、高音域から低音域まで幅広く使用する非常にレベルの高い曲であるのに加え、合宿から戻った四日後に本番という時間との戦いでもあった。当吹奏楽部では普段、中学生と高校生と一緒に演奏をするというのが特徴の一つである。だがコンクールのみは例外であり、中学生は普段隣にいない高校生の存在なしで演奏しなければならぬ。けれども、中学生は自発的に合わせの練習を行い、先輩後輩の垣根やパートの枠を越えて全員が一丸となって練習を行っていた。その結果見事に金賞を受賞し三年連続金賞という偉大な実績を残すことができた。この成果は全員が全身全霊で挑めた証拠であり、間違いなく

心身共に成長することができた。

そして中学コンクールの一週間後に高校コンクール本番は行われた。それまで毎日九時から十八時三十分まで、コーチの先生方によるレッスンや西澤先生による合奏・分奏を行った。これまでの実績に加え、中学生が金賞を取ったという事がさらにプレッシャーとなり皆必死に曲に食らいつき練習を重ねた。さらに私の引いたくじにより演奏開始時間が普段よりかなり早く、当日朝の集合が六時三十分となり十分なアップの時間を取れないという事が起きた。朝から楽器を吹くことに慣れるために、本番が近づくにつれて集合時間を早めていくことも行った。迎えた本番の日は誰一人欠けることなく朝早くに集合し、万全の状態での演奏を迎えた。私は一音目を吹いた瞬間に、これまでの練習が頭の中を駆け巡り、今まで積み重ねてきた演奏の

巨人の肩の上に立つ ―科学部

この夏、私は総合文化祭の自然科学部門に参加した。総合文化祭の開催地は毎年異なり、第四八回となる今年度は岐阜県で開催された。自然科学部門では、物理、化学、生物、地学の各分野において、全国四七都道府県の代表が集まり、それぞれの研究を発表す

る。私は化学分野の東京都代表として大会に参加した。科学部での約三年間をともにしてきた研究を、全国の中で優れた科学者の先生方や同世代の研究者に見てもらえる機会を得られたことを、大変嬉しく思っている。

大会については口頭発表の形式で発表時間は十二分間だった。与えられた時間は一見長く感じられたが、実際にプレゼンの準備に取り掛かるとその短さに驚いた。私の研究テーマは「鉄光触媒の可能性」であり、一般的に光触媒として使用される酸化チタンの代替として、鉄さびを利用できるかという点に関する研究である。この研究は中学三年の終わりがら始めたもので、実験手順が文献通りに進まないことや、予想外の結果に悩まされることも多々あった。しかし、この研究を進めるうちに強い愛着が湧き、次にどのような検証を行うか考えること自体が楽しくなった。そんな思い入れのある自分の研究を十二分間にまとめる作業は非常に困難だった。特に、どの部分を膨らませて自分が取り組んできたことや研究の魅力を伝えるか、逆にどの部分を削るべ

きに苦心した。本番に向けては顧問の先生方に助力していただき、プレゼンの内容から発表のアドバイスを至るまで、真摯に対応してくださった。この場を借りて改めて先生方にも感謝を伝えたい。

発表当日は緊張したものの、始まってしまえば思いのほかスムーズに言葉が出て、自分の研究を楽しんで聞いている方々に伝えることができたと考えている。さらに他の方々の研究発表も非常にレベルが高く、全国大会にふさわしい面白い研究ばかりで、それらに夢中になっていくうちに時間があつという間に過ぎた。特に化学分野では、自分の研究にも一部関わるような内容の研究もいくつかあり、そのうえで新規性のあるものも多く、自分の研究のさらなる可能性についても視座を高めることができた。

この総文祭では発表だけでなく、地域文化にも触れることができる貴重な機会が設けられていた。大会の一環として、岐阜県の文化や伝統、技術に触れる巡検に参加した。私は伝統的な川漁法である長良川の鵜飼いを見学した。長良川周辺の美しい自然とともに、鵜を用いた伝統的な漁業技術に驚かされた。このような岐阜県でしか味わうことのできない貴重な経験を通じて、発表だけでなく開催地への理解も深めることができた。総合文化祭を運営してくださった岐阜県の高校生の方々にも感謝の気持ちを伝えたい。

結果として、私は文化庁長官賞という全国で二番目の賞を受賞することができた。これまでの苦労や研究の魅力が評価されたよう

で、非常に満たされた気持ちになった。もちろん私の研究は一人の努力だけでなく、多くの方のご意見や協力があったからこそ賞であることは間違いない。今後は研究をさらに進めるのでなく、この研究を誠実に伝えていく。この研究の幅がどこまで広がりを、さらに深みのある面白いものになるのかを楽しみである。

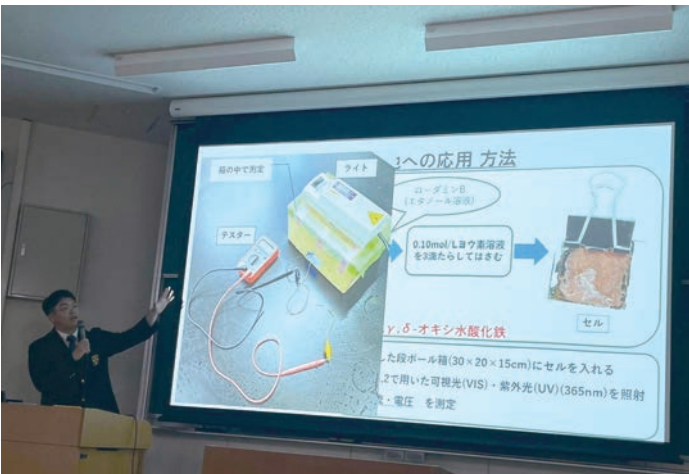
（高三 初田全彦）

中学庭球部 団体戦全国大会出場

中学庭球部は、一年生から三年生までの四十人弱で活動してきました。練習は月曜日、木曜日、金曜日と土曜日（隔週）で週に三回行います。月曜日や木曜日には、毎回外部指導者の方たちも来てくださっています。

す。そのほか休日を中心に公式戦が入り、練習試合を行うこともあります。部活には主に三つの目標があります。一つ目は、テニスという個人競技をチームで戦って、チームで勝ち進み全国大会に出場すること。二つ目は、この部活動を通じて自立すること、学び、部員全員が立派な大人に成長すること、三つ目は、仲間とともに必死に頑張った三年間を、大人になったときの自信にすることです。つまり、将来何かつらいことがあったときに、「あの時あれだけ頑張れたから大丈夫だ」と思えるようなチームを作りたいということです。この三つの目標を達成するために、普段の練習でボールを一球一球に食らいつき、ひたむきに努力すること、心技体を養ってきました。そのためこの代の庭球部はとも強

く、そして深い絆で結ばれるチームになることができました。そんな私たちの代の団体戦は、新人戦では都大会ベスト16だったものの、三年進級後の春から夏にかけての大会では、都大会は三位、関東大会は五位に進出し、そして富山市で開催された全国大会にまで出場することができました。また個人戦のダブルスでも熊谷・秋山ペアが都大会準優勝・関東大会出場という素晴らしい記録を残すこともできました。私たちの目標であった全国大会に出場できたのは、この目標に向かって部員全員が努力をしたからだだと思います。試合に出る人は、負けたら引退という大変なプレッシャーの中で全力で戦い、試合に出ない人たちも選手のサポートに回り、応援をしてくれました。全国大会では



惜しくも勝ち進むことはできませんでしたが、この仲間に巡り合えたこと、その仲間と同じ目標をもって練習できたことを心から感謝しています。

最後に、この三年間私たちのことを指導し、ここまで導いてきてくれた顧問の重原先生に、深く感謝したいと思います。また、顧問の佐山先生と佐藤先生からも多くのことを学ばせていただきました。そのほかにも、保護者や外部指導者もいつもサポートしてくださいました。私たちが全国大会に行けたのは、こうした方々の支えがあったおかげです。三年間本当にありがとうございました。

(中三 新井拓実)

鉄道研究部 第十六回全国高等学校鉄道模型コンテストにて三冠受賞

八月二日から五日と三日間行われた鉄道模型コンテストに我々鉄道研究部は今年も出場しました。今年の作品のモデルとした地は川崎市の工業地帯、特に市営埠頭というバス停付近の工業地帯をモデルに作成しました。

今回の作品では、今年度から本格的に導入したレーザーカッターを使用して、ジオラマのストラクチャー一個一個をより精密に、できるだけ既製品も使わないということを心掛けて制作しました。特にジオラマの左前方付近のエリアに設置しているDD55型のNゲージ車両は実際に現地でDD55型を運行している神奈川臨海鉄道様から資料を提供していただき、細部までこだわって制作しました。その他にも分留塔や冷却塔、

パイプといったストラクチャーは、七種類の塗料を用い、汚し塗装などを用いてよりリアルティを追求しました。また毎年ジオラマに組み込んでいる水表現も川崎の特徴をうまく表せたと思います。

しかし一方でレーザーカッターという新たな仕事が生まれた結果、仕事により専門的になってしまい、部員に対しての仕事の振り分けなどがあまりうまくできなかつたという反省があります。そのため一部の部員の負担が増えてしまったため仕事に遅れが生まれ、搬出の直前まで作業をするという事態になってしまったため、次回のコンテストでは仕事の振り分けというのを意識して取り組みたいと思います。

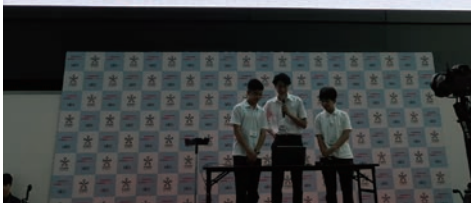
コンテスト当日は、他校の作品を見学や、他校の生徒との交流など三日間楽しく過ごすごことができました。またありがたいうちに神奈川臨海鉄道様から飯田様と松浦様のお二

方が訪問してくださいました。今回の模型を製作するにあたって一番お世話になった方に作品を見てもらったことはとても嬉しかったです。

今年はJR貨物賞、ベストムービー賞、健闘賞の三つの賞を受賞しました。これもひとえに制作に携わった部員や顧問、応援してくださったOBや保護者、DD55型の画像提供してくださった神奈川臨海鉄道様、撮影機材の貸し出しをしてくださったパナソニック エンターテインメント&コ

ミユニケーション株式会社のおかげです。あるがとうございました。また来年以降も引き続き模型製作を行っていき新しいことに挑戦つづけ、今年以上の結果を出してもらいたいと思います。

(高二 眞鍋孝太郎)



十 今月の聖句

私を見守っている処

詩編23編

主は私の羊飼い。／私は乏しいことがない。

主は私を緑の野に伏させ／憩いの汀に伴われる。

主は私の魂を生き返らせ／御名にふさわしく、正しい道へと導かれる。

たとえ死の陰の谷を歩むとも／私は災いを恐れない。／あなたは私と共におられ／

あなたの鞭と杖が私を慰める。

私を苦しめる者の前で／あなたは私に食卓を整えられる。／私の頭に油を注ぎ／私の杯を

命あるかぎり／恵みと慈しみが私を追う。／私は主の家に住もう／日の続くかぎり。

浮世絵「神奈川沖浪裏」を見ると、大波に立ち向かっている船の人々が映し出されています。彼らが魚を捕っているのか、移動しているのかは定かではありませんが、巨大な波に対して必死に戦っている様子が見えます。この激しい海の風景と対照的に、遠くには富士山が静かに佇んでいます。荒れ狂う海や奮闘する人々とは異なり、富士山は変わらずそこに立ち、すべてを超越した存在のように見えます。まるで、私たちの変わり続ける激しい人生を、変えることのない何かが見守っているかのようです。

上記の詩編23編は、清里の清泉寮を設立することに貢献したポール・ラッシュが日常的に黙想していた聖書の一節です。今年、中学二年生のキャンプで清泉寮を訪れた際、資料館となった彼の住居に行き、彼の書斎と寝室にある窓から外を見てみました。その窓からは、正面に富士山が見えました。ポール・ラッシュは、自分とは縁のなかった清里の地で、何もない牧草地にビジョンを持ち、牧場やキャンプ場、教育施設などの宣教活動や慈善事業を展開しようとした。その過程では、多くの失敗や挫折、葛藤や対立があったことでしょう。それでも彼が諦めずに前に進み続けることができたのは、富士山のように変えることなく、神が自分とその活動を愚直に見守っているという信頼と信仰があったからではないでしょうか。

生徒の皆さんを含め、私たちも、失敗や挫折、葛藤や対立が避けられない激しい人生を生きています。そのような中、そのすべてを見守り、私たちが愛に向かって歩んでいけるように導く、富士山のような存在として立教池袋中学校・高等学校があるように、また神が私たちを見守っていることをいつも刻む立教池袋中学校・高等学校となることを願ひ、祈ります。

(チャプレン 李 相寅)

